The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評・新刊紹介＞C.＝サッルスティウス＝クリスプス著　合阪學・鷲田睦朗　翻訳・註解　『カティリーナの陰謀』 / 中谷功治　『歴史を冒険するために：歴史と歴史学をめぐる講義』 / 藤川隆男　『猫に紅茶を：生活に刻まれたオーストラリアの歴史』
Author(s)	中尾, 恭三; 吉谷, 智美; 安井, 倫子
Citation	パブリック・ヒストリー. 2009, 6, p. 150-158
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66471
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

C. ＝サッルスティウス＝クリスプス著
合阪學・鷲田睦朗　翻訳・註解
『カティリーナの陰謀』

大阪大学出版会、2008 年 5 月、A5 判、2520 円（税込）、ISBN978-487259270

古典作品に親しむことは、古代の歴史・文学・思想を学ぶ者だけにかぎらず、多くの読者にとって有益な体験となる。わたしたちが生きる現代にまで伝わる古典作品は、そのおおくが豊かな教養、深い見識をふんだんに織り込んでいるがゆえに、千年、ときに二千年をこえる長きにわたって読みつがれてきたからである。しかし、西洋の古典作品は、もちろん古典ギリシア語・ラテン語で記述されている。のみならず、当時の地理・歴史・習俗などの知識が必要とされる場合がまれではない。そのため母国語に翻訳され、適宜註解がほどこされた古典作品が容易に手に入る環境が、ほとんどの読者にとって望ましいのである。日本では長らく、西洋古代の哲学者・歴史家たちによる古典作品の翻訳・出版がさかんにおこなわれており、すくなからぬ数の読者をひきつけていることをご存知の方はおおいであろう。その西洋古典作品翻訳書のなかに、あらたに 1 冊の有意義な書物がくわわった。それが本書である。

本書は、ローマ人歴史家ガイウス＝サッルスティウス＝クリスプス（前 86 年 - 前 35 年）による『カティリーナの陰謀』（以下『陰謀』）の翻訳・註解である。訳者である合阪學氏と鷲田睦朗氏は、古代地中海世界、ローマ共和政後期を専門とする歴史家であり、本書を一読しただけでも両氏がこの翻訳事業にどれだけの熱意をそそいできたのかが伝わってきた。深い知識と卓越した技術が要求され、なみなみならぬ手間のかかる古典史料の翻訳と註解に両氏がついやした労力はいかほどであったであろうか。本書を一読した評者は、素直に感動の念を抱いた。

原著は、著者サッルスティウスが実際に目にし、耳にした一大事件カティリーナの陰謀事件をめぐる顛末を、自身の見解を織りこみながら語ったものである。かれは、単にローマ共和政末期を生きた著作家であったのみならず、執筆活動にいたるまでに帝国の首都ローマで政治家としての経歴を積んでいた。すなわち、同時代ローマの政治情勢にとりわけ精通した人物であった。そのためこの作品は、ローマ共和政末期の歴史・思想・文学を研究するうえで、第一級と位置づけられる貴重な史料である。さらには、近代にいたるまでラテン語で記述された数ある書物のなかで、聖書についでもっともおおくの人びとに読まれてきた作品であるといわれている。この 2 点だけでも、本書の出版がローマ共和政研究にどれほど重要な意味をもつかが推し測れるだろう。

しかし、ただ翻訳と註解のみならず、訳者両氏による詳細かつ明快な序論と解説、本書末尾に地図と年表をくわえたひじょうに充実した内容となっている。これは、ローマ史専門家たちの要に供するのはいうにおよばず、これからローマ史を学ぼうとする初学者や歴史を学んで日の浅い読者でも本書のみで必要な知識を得ることができるように、との配慮が行き届いているためである。以下、評者の手にはあまるかとおもわれるが、可能なかぎりで評をくわえていく。

『陰謀』とはいかなる作品であろうか。著者サッルスティウスの叙述は、陰謀の首謀者カティリーナの性向と著者自身が抱く歴史観を平行して提示していくことからはじまる。かれにとってローマの歴史は、理想的社会が実現されていた市民団で構成される国家から、社会に腐敗と退廃的雰囲気がはびこる帝国への没落であった。そのような帝国の現状からあらわれたのが、カティリーナだったとサッルスティウスは見たのである。古い貴族家系出身のカティリーナは、属州や首都ローマで公職を経験した。しかし、いく度かのコンスル選挙での失敗を重ね、暴力的手段によって政権を奪取しようと試みる。これがいわゆる「カティリーナの陰謀」である。最終的に陰謀は露見し、ローマ軍によってかれの下に集まった軍勢は壊滅させられてしまう。当のカティリーナも合戦のさなか命を落とす。以上が『陰謀』のあらましである。

翻訳文そのものは、原文のラテン語にきわめて忠実に訳されている。随所にルビで原語が示されているのも目を引く。これはすなわち、読者による原文との比較の遡上に本書を積極的にのせようという、訳者両氏の真摯な研究姿勢を反映したものであることは疑いようがない。註解も充実している。この部分は、ローマ史ならびに古典ラテン語に深く通じた両氏の力がいかんなく発揮されている部分であり、陰謀事件の背景のみならず、ラテン語がもつ細かなニュアンス、サッルスティウスの哲学的思考にいたるまで微にいり細をうがった註がほどこされている。ときには、事件の大きな背景となったローマ共和政末期の政治状況にかんしてするどい見解が述べられていることもあり、見逃すことができない註もおおくあった。そのため、古代ローマ史やラテン語をこれから学ぼうとする人々にとって、本書は格好の教科書となる。なぜなら、本書を片手に『陰謀』を原書で読みすすめていけば、ラテン語読解の鍛錬になるだけでなく、ローマ史の知識も自然と身につくことがおおいに期待できるからである。

つぎに両氏による解説を簡単に紹介していきたい。

解説は 2 部構成になっており、翻訳の前後に配されている。共和政後期の政治状況とサッルスティウスによる執筆動機を論じる鷲田睦朗氏による序論、帝国の「没落」と同時代人の歴史叙述という視野にたって論じられる合阪學氏による解説、とバランスのとれた構成となっている。

鷲田睦朗氏による序論「カティリーナとサッルスティウス――『カティリーナの陰謀』の 2 人の造り手たち」では、著者サッルスティウスの略歴と作品の背景、後代の人びとによる受容といった側面から、作品に光があてられている。特筆すべきは、鷲田氏独自の観点から提示される、サッルスティウスの執筆動機である。ここで、単にサッルスティウスがカティリーナを、陰謀事件をおこした悪人としてとらえただけではなく、ある種の共感の念を抱いていた可能性が提示されている。著者が表面にださなかった、叙述の裏にある真の執筆動機にまで切り込んだ分析がおこなわれているのである。

氏は、『陰謀』内で散見される「大胆な」を意味するラテン語の形容詞 audax とその派生語（「大胆さ」audacia など）の用法を手がかりに議論をすすめていく。この audax は、文脈によっては「無謀な」や「野心的な」と否定的意味合いをもつ。しかし、『陰謀』においては、肯定的文脈で頻繁にこの語が用いられていることが特徴である。さらに、肯定的な用例がとりわけ、カティリーナと陰謀に加担した人びとを評価する文脈にみられる。鷲田氏はこの点に、サッルスティウスがカティリーナにたいして抱いていた共感を読み取るのである。audax を軸にカティリーナ評価をおっていけば、かれがただ悪漢として性格づけられているのみならず、英雄的に描かれる描写に出くわす。サッルスティウスは、カティリーナと同様政治的挫折を味わった人物であった。そのため、好意的とはいえないまでも、カティリーナにたいして特別な感情を抱いていたとしても不思議ではないだろう。

クーデター事件を引き起こしたカティリーナは、サッルスティウスが生きた当時の社会においてネガティブなイメージで語られている。それが公式的な「事実」となっていたため、おおっぴらにカティリーナにたいする共感を表にだすことはサッルスティウスには不可能であった。さらに、当時の政治状況の中では、言論の自由が実質的に失われてしまっていた。このような中で、陰謀事件を引き起こしたカティリーナにたいする共感を見事に隠しとおして『陰謀』を執筆したサッルスティウスにこそ、「偽り隠す」者の名がふさわしい、と氏は結論づけている。著者サッルスティウスとカティリーナ、かれらが『陰謀』の「2 人の造り手」であったのである。

これについて、氏みずから「これまでにない解釈を提示できた」と述べており、評者にも説得性をもった議論であるように感じられた。しかし、著者サッルスティウスは、ローマを没落しつつある帝国としてとらえ、当時のローマ社会を退廃的イメージでもって表現していることも見逃せない。評者が本文を読んだかぎりでは、「没落」し

つつあるローマ帝国への憂慮も叙述に強く影響しているとおもわれた。かれの目には、この陰謀事件が当時のローマ社会を如実に体現した出来事として映ったのではないだろうか。外的要因、カティリーナへの共感にあわせて、サッルスティウスが抱いていた歴史観をもふくんだ、重層的な解釈が可能ではないだろうか。

合阪學氏による解説「「没落」への危機に立つローマ—サッルスティウス『カティリーナの陰謀』を読む—」では、サッルスティウスの叙述にしたがいつつ、ローマ史全般を俯瞰した論述がおこなわれている。

まずは、「(1) キウィタスとインペリウム——カティリーナの登場まで——」において、陰謀事件にいたるまでのローマの歴史が、サッルスティウスが抱く歴史観にそったかたちで概観されている。くわえて、ローマが都市国家から「ローマ国民の帝国」へと発展していく過程において、どのように周辺諸国との関係を築いてきたか、どのように征服地を属州として編入していったかが解説されている。これによって、サッルスティウスの歴史観と実際のローマ史とを比較することができ、かれが抱いた思想を把握する材料となる。

つぎの「(2) カティリーナの陰謀 (その 1)」と「(3) カティリーナの陰謀 (その 2)」では、サッルスティウスがとらえた当時のローマ社会の実情と事件のあらましが、著者の叙述にそうかたちで解説されている。

最後の「(4)「ローマ国民の帝国」の行方——歴史家たちによる展望——」では、氏が専門の 1 つとする古代人による歴史叙述のフィールドへと議論の射程が延び、サッルスティウスの前後に活動した著述家たちが抱いたローマ帝国史観が、かれらの著作をもとに論述されている。これらサッルスティウス前後の歴史家たちの著作と思想を比較することで、より一層かれの歴史観を把握することが可能となる。

とりあげられる歴史家は、サッルスティウス以前では、ポリュビオスとポセイドニオスである。かれらはともにギリシア人としてローマ帝国を眺めた人物であり、サッルスティウスと共通する視点は、過去の栄光にみちたローマから、安定を手に入れたローマ帝国にいたって、道徳的退廃が幅をきかせるようになった、との観点である。この思想は、サッルスティウスを経て、ローマ帝政期にいたるまで連綿と受け継がれてきた。ポリュビオスは、ローマが地中海世界に覇権を伸ばし始めた前 220 年からはじまり、アカイア戦争、コリントスの破壊、そしてカルタゴが屈服した前 146 年までの歴史を同時代人として記述している。かれの後を引き継ぎ、『ポリュビオス以後』という表題で歴史を叙述したのがポセイドニオスである。かれの同盟市戦争にかんする段には、はっきりと「奢侈と放縦に陥った」ローマの道徳的退廃を主張する記述がみられ、サッルスティウスへとつづくローマ没落史観がみとめられる。

サッルスティウスは、ポセイドニオスと共通して「没落」の思想を抱いていたが、それのみならず「帝国の遷移」の思想をも著作に反映させている。すなわち、先行する帝国が没落した後、代わって後続の別の国民が次の帝国を担うという覇権の変遷を歴史観として抱いていたのである。これは東方で流布していた四帝国説から影響を受けたもので、アッシリア、メディア、ペルシア、マケドニアの 4 帝国の後にあらわれた第 5 の帝国としてローマ帝国を措定しているのである。このように、ひとつの帝国が覇権を握り続けることはなく、前帝国の没落とともに次の帝国が勃興してくる、との歴史観にのっとっていたサッルスティウスにとって、同時代のローマ帝国が没落の過程にあったのは、けだし当然のことと映ったのかもしれない。

サッルスティウスとほぼ世代をおなじくした 2 人の歴史家、ディオニュシオスとポンペイウス・トログスは、ローマ帝国をはじめとした諸帝国の変遷を、やはり没落を軸にとらえている。ディオニュシオスは、ポリュビオスの影響を強くうけ、過去に繁栄したオリエントとギリシアの諸帝国をローマと比較し、その優越を強調している。しかし、ギリシア人であったかれは、ローマ人からいくぶん距離をとった視点でローマ帝国を眺めていた。かれにとっても、地中海世界の覇権を手に入

れた後のローマの歴史は、腐敗によって秩序が破壊される過程であった。後者のポンペイウス・トログスは、ローマ中心的な一元論で歴史をとらえるのではなく、「帝国の変遷」の概念をはっきりとあらわしていたところが特徴である。しかし、四帝国の継承ではなく東西の2大帝国の変遷として歴史をとらえた点が、サッルスティウスと異なる。トログスは同時代の地中海世界を、東のパルティアと西のローマ帝国が対峙する世界としてとらえた。

サッルスティウスをふくむこれら歴史家たちに共通するのは、なんであろうか。現状を没落の過程ととらえ、過去を理想化する思想は、かれらだけが抱いたものではなかった。古くは詩人ヘシオドスにおいても、神話時代から人間の時代にいたる段階的衰退の思想がみてとれる。古典期ギリシアの歴史家・哲学者たちも、政体の循環、覇権の移り変わりを歴史の中にみてとっている。現状の否定と過去への憧憬、覇権の遷移の概念は、時代と地域をこえてひろく人びとに共有された意識であったのかもしれない。これらの思想を、ローマを中心とした地中海世界の帝国の遷移という広い視野でとらえなおしたのが、ポリュビオスをはじめとした歴史家たちであった。サッルスティウスはその流れに与し、イタリア半島内で生じたカティリーナの陰謀事件を叙述する際に、帝国という広い視野をもって事件の諸相をあきらかにしようと努めた人物だったといえるのではないだろうか。

なお、ポンペイウス・トログスの『ピリッポス史』はユスティヌスによる抄録のかたちでかなりの文量が現存しており、合阪氏によって『地中海世界史』と題され翻訳・出版されている（ユニアヌス・ユスティヌス抄録、ポンペイウス・トログス著、合阪學訳『地中海世界史』、京都大学学術出版会＜西洋古典叢書＞、1998年）。またさらに、リウィウス、ポリュビオスの史書も、日本語への翻訳が進行中であり、何冊かはすでに世に出されている。本書につづいてこれらの作品を読むことで、西洋古代の歴史と古典への親しみをよりふかめてみてはいかがだろうか。

以上、評者の能力がゆるすかぎり、評をこころみた。本書の出版で開かれたローマ共和政理解の新地平から、今後どのような研究が進められていくのであろうか。興味はつきない。

最後に私事になるが、評者は後学のためにと両氏に無理をお願いして、いく度か翻訳作業を見学させていただいたことがある。その時感じた両氏の熱意が、一冊の本として結実したことを自らのことであるかのように喜ばしく感じている。赤いカバーをみるたびに、合阪學先生に教えを請うた勉強会の後、先生にふるまっていただいたワインの味がしみじみと思い出される。

（中尾恭三）

中谷功治
『歴史を冒険するために
——歴史と歴史学をめぐる講義——』

関西学院大学出版会、2008年10月刊、A5判、261頁、2000円＋税、ISBN978-4-86283-034-0

本書は、歴史学についての根源的な問いかけを目的とした、初学者のための歴史学入門書であり、著者が大学で行った講義をもとに、13回の講義形式で構成されている。「歴史学という学問研究の方法の背景にある思考パターン、メンタリティの問題」（p.6）が主要なテーマとなっており、歴史と歴史学の根幹について思考する手ほどきが、読者に向けて平易な言葉で記されている。

また本書は、高校・中学で歴史科目を担当する教師にも、多くの示唆と励ましを与えてくれる。学校現場の教師はいつも、「なぜ歴史を勉強するのか」という問いに直面している。それは、生徒と教師自身から発せられるもので、やがて「歴史とは何か」「どんな立場で歴史を教えるべきなのか」、「歴史の勉強を通じて、生徒に何を獲得させることができるのか」という問いにつながってゆく。本書は、これらの問いを考えようとする教師にとって、思索の可動域を広げる助けとなるはずである。

著者は、まず本書の冒頭で歴史を学ぶことを「冒

険」にたとえる。全13回の講義内容は、その「冒険」のための準備として、段階的に4つのステージに分かれている。また、各回最後には、補足説明や参考文献の紹介、そして講義の支援者であるコメンテーターからのメッセージが添えられている。以下、本書の構成に従って内容を紹介し、評者の立場から若干の感想・疑問などを記して書評としたい。

なお、評者は大学では西洋史を専攻し、現在は高校で世界史Bを担当している。教職7年目の、経験・力量ともに乏しい若輩の評であるが、ただ学校現場からの声の一つとして、以下をお読み頂ければ幸いである。

Stage Ⅰでは、「歴史とは何か」が考察される。ここで著者は、「歴史」と「過去」、「歴史」と「歴史学」など、混同されやすい用語を対比させることで、「歴史」の持つ性質を浮かび上がらせている。この対比の手法は、他の問いについても用いられる本書の特徴でもある。本書では数多くの問いが論じられるが、学部生や専門家でない学校教師にとって、なかなか難しいものも多い。しかし、難解な問いであるにもかかわらず、本書が全体を通じて非常に読みやすいのは、この特徴のためであろう。

加えて、たとえ些細に見えることでも、論理的にきちんとその違いを指摘し、それぞれの性質を明らかにしようとされていることも、初学者には大きな助けとなっている。「過去」と「歴史」を区別する鍵となるのは、私たち人間の「まなざし」の有無である。「過去」は、単にかつて存在したものだが、「歴史」は私たち人間が過去に「まなざし」を向ける、つまり振り返ることをしなければ存在しない。そのとき、「まなざし」には特定の対象があり、さらにその対象への「問いかけ」を含んでいると指摘される。その「問いかけ」の結果として「書かれた」ものが「歴史」であり、「過去」はすなわち「歴史」ではない、と展開されるのである。

また本書は各回各節で、初学者のために、問いの提示・問いへの回答と解説が、実に丁寧になされている。特にStage Ⅰでは講義の最後に、内容が箇条書きでまとめられており、読者が「迷宮」の入り口にたどり着く前に迷ってしまうという事態を防いでいる。

Stage Ⅱでは、「歴史の見方」や「歴史家の仕事とは」という主題が取り上げられ、Stage Ⅰの議論が本格化する。歴史と事実の関係、歴史を学ぶ具体的な思考のパターン、および過去に対する「まなざし」のありようについて考察がなされる。評者も、生徒や同僚の先生から、「大学の歴史学では何を勉強するのか」、「高校で習う歴史と大学の歴史は何が違うのか」、「歴史家はどんな仕事をしているのか」と尋ねられることがあるが、著者はStage Ⅱで、こうした問いに答えようとしている。

まず著者は、歴史を学ぶ際にもっとも重要なものは「想像力」であるとする。過去の当事者の身になって想像し、「ああなるほど」と共感し、「そうだったのか」と了解することを出発点におく。そこに歴史の楽しさもひそんでいる。しかし歴史学は、想像・共感・了解のみにとどまらない。現在に生きる私たちの視点からの事実「分析」へ進み、自分なりの「解釈（判断・評価）」を下し、それを「説明」することが求められる。ただし、その解釈には「偏見」が入り込む可能性があることを常に意識しておかなければならないとも指摘されている。

評者は学生時代、ただ好きなだけでは歴史の研究はできないのだ、と痛感したことがあった。学問としての歴史学では何が求められるのかを、本書は上記のように丁寧に述べており、歴史を学ぼうとする学部生にぜひ熟読を勧めたい。

Stage Ⅲは、歴史学の意味を考えることにあてられている。著者は、第7回の「歴史学は役に立つのか」において「歴史学はあまり役に立つとは思えない」と述べる。また、「歴史学は普遍的なレベルにおいて役に立つことを目指す学問ではな」（p.125）く、歴史や文学などの人文学の本質は、究極的には「好き嫌い」というレベルに行き着くものであるとする（p.130）。第8回では、むしろ歴史学を何かの役に立てることの方が危険であり、また、歴史学から教訓を引き出すことは学問レベルの仕事ではなく、歴史に向き合う個々人

に委ねられるべきものであるとする。さらに、科学と歴史学の関係についても、歴史は科学的ではないという結論に至る。学校現場の歴史教師が、程度の差はあるにせよ、いくらか予感していたことを、本書で明言してくれたように思う。

しかし第9回で、著者は、歴史を学ばなかった場合の不利益を示すことによって、歴史を学ぶ積極的な意味を考察する。これまで人類が基本的に歴史を大切にしてきたこと、現在の世界においても多くの人が歴史を重要視していること、過去の歴史をないがしろにするということは、その人と他者とのコミュニケーションを否定することになりかねないことが指摘されている。

また、もう一歩進んで、人間は年をとれば自分の言動に責任を持たねばならないが、歴史学は過去の人々の言動について実例を提供することもでき、過去への新たな問いかけや共感を通じ、過去を批判的に考察することで、人間が成長することもできるとしている。

現在、学校現場では、他者とのよい人間関係を構築する力を養うことが、教育の大きな課題となっている。一個の人間だけで存立する社会はありえず、また他者との共通点・相違点を知ることによって自己を知るという視点は、さまざまに議論されてきた。これを想起するとき、歴史学が他者と自己について考察するという性質を持つところに、歴史を学ぶ積極的な意味の存在を評者は予感する。本ステージは、あえて「迷宮」に踏み入るかのような問いへの挑戦であったが、「役に立つか、立たないか」の次元を越え、歴史学を学ぶ積極的な動機の手がかりを与えてくれる。

Stage Ⅳでは、「歴史をめぐる人々の思い」という題で、歴史学そのものよりは、人々が歴史を共有するシステムや場、記憶について論じられる。

第10回では、なぜ公教育で歴史教育がなされるのかを国民国家との関係から明らかにし、さらに、人々の歴史像の形成に大きな影響を与えるのは、歴史を「語る」学校の教師であることを指摘する。そして著者は学校の教師に対し、可能な限り最新の研究成果の取り込みと、授業の更なる活性化を求めている。

第11回では、集団が共有する社会的記憶の性質とそれがはらむ問題点について、歴史との関係から考察が加えられている。人々の記憶に寄り添いつつも、記憶が重視する事実にとどまることなく、出来事の原因や背景を考察すべく絶えず問題を提起し続けることが、歴史学の役割であるとしている。

第12回では、個人と歴史の関係について論じられる。歴史に何も求めない立場もあるが、人が歴史に求めるものにはロマン・ノスタルジー・教訓があり、それらは、歴史学に直接つながらないものの、歴史研究のパワーの源であるとされる。歴史とは、過去の当事者たちへの共感を前提としているということが、再びここで確認される。ただし、歴史家は当時の人の感情も汲み取った上で評価をすべきで、さらにその背後には、いつの時代であっても多くの人の生死を巻き込んだ重大な出来事が控えている可能性が高いことを心得ておくべきであると、注意を促している。この点は、歴史を語る役割を担う学校の教師についても言えることであろう。最後のステージは、歴史と社会とのつながりを示すことで、歴史を語ることの重さを気づかせ、さらに励ましを与えてくれるステージとなっている。

次に、主に Stage Ⅳの内容に関連して、学校の教師の立場からの課題・疑問点を示したい。

第1に、教師が歴史を語るとき、それを受け取る生徒の能動性については、どのように考えられるであろうか。私たち教師は、生徒自らが学び考える授業の構築を目指しているが、すでに歴史家によって取捨選択された事実からなる教科書を手に、教師や教科書が示す以外の「共感・了解」「分析」「解釈・評価」を生徒が自ら行うことは、一斉教授方式の授業で可能であろうか。

第2に、著者が Stage Ⅳにおいて次のように述べている点についてである。「歴史の授業で覚えなければいけない事柄というのは、当事者の立場に立ってみれば、忘れたくても忘れられない、忘れるわけにはいかない事件や出来事であるのです。つまり、これらを努力してでも覚えないといけない、というのでは事態は本末転倒していると

いえます。」（pp.225）

これは、歴史を学ぶときの基本要素として必要な事実を覚える努力をすべきではないということではなく、歴史に残る事実が本質的にどのようなものであるのかということであろう。そうだとすれば、「忘れられない」ほどの歴史の事実の「重み」を、生徒に伝えることが、学校の教師の課題となる。言い換えれば、生徒が当事者の立場に立って歴史の事実を想像し、共感し、了解して、「忘れたくても忘れられないことだったのだ」と、捉えることができるような授業が求められるということである。ではそのために、学校の歴史の授業では、どんな実践が可能であろうか。

評者の実践例の一部は、次のようなものである。

①実物教材を使用する（香辛料・蚕の繭・綿花・飛び杼・当時の出版物・コーランなど）
②実際にその場でできることはやってみる（メフレヴィー教団の旋舞など）
③クラスをある社会に見立て、生徒をその構成員として、歴史の事件を疑似体験させる
④生徒に二人一組のペアを作らせ、意見を述べ合う機会を設ける

①の例では、教科備品を利用することも多い。また②は、実体験を通じて、いわば生徒の想像力を刺激しようというものである。③は、たとえばアテネ民主政の授業で、クラスの生徒を貴族・富裕市民・市民・奴隷にわけ、参政権の拡大過程を疑似体験させるというようなものである。しかし、これだけでは授業が一過性のイベントで終わる可能性もあり、個々の生徒が思索を深められるような工夫をすることが必要である。そこで、④のような機会を設け、授業のなかで、「なぜなのか」「自分ならどうするのか」という問いを何度も発し、生徒同士が互いに意見を述べ合い、考える授業づくりを心がけている。こうして、生徒本人にとっても「忘れたくても忘れられない」授業にすることを目指している。

しかしこうした実践で、本当に過去の当事者の思いに迫れるのか、評者自身、迷うことが多い。また、評者の未熟さのため、本書が示すような歴史の「重み」を十分に伝えることができず、生徒が単に覚えただけで、思索を深めるまでに至らない面もある。それでも、歴史の事実が少しでも記憶に残っていれば、それが将来、何らかの新たな知見を生徒にもたらすのではないかという期待を持って、さまざまな先生から教えを受けながら、試みを続けているという状態である。今後も、本書での議論を手がかりに、いっそう励みたいと思う。

以上、自分の不勉強をおいて述べた。また、評者の能力と紙面の制限から、本書の扱う興味深い議論すべてを紹介できなかったことを付け加えておく。

本書は単なる歴史学の入門書ではない。一言では答えられないような難問を扱っているにもかかわらず、本書は読んでいて楽しい。学生・教師・研究者など、それぞれの立場で「冒険」しようとする読者と、ともに歩んでくれるような一冊である。このような本に出会えたことに、感謝したいと思う。

（吉谷智美）

新刊紹介

藤川隆男
『猫に紅茶を
——生活に刻まれたオーストラリアの歴史——』

阪大リーブル 5、大阪大学出版会、2007 年 12 月刊、220 頁、1700 円 + 税、ISBN978-4-87259-238-2

本書は、「かなりのオーストラリア『おたく』」と自認する著者によるオーストラリア史の概説書である。平易な文章、ユーモアを交えた筆致は、読者をぐいぐいとオーストラリアの奥深い地平まで導く。概説書とはいえ、著者自身がオーストラリアで体験した事実、出来事、そして出会い・関わりを持った人々を通して、その事象や人間の今の存在の歴史的・文化的背景を調べ、追求すると

いう、歴史を学ぶ者としての正攻法によって書かれている。その意味でも本書は奥が深い。時に鋭い筆致が、「多文化主義」の底に流れるナショナリズムを暴き出し、「白豪主義」から完全には脱皮できていないオーストラリアの姿を読者に露わにしてくれる――著者はこのことを「歴史の地下水脈と表層の歴史との段差やずれ」という言葉で表している。

本書は冒頭に「故 D. W. A. Baker の思い出に」とあるように、著者が恩師と仰ぐドンことベイカーとその家族や友人、著者自身の家族や友人、すなわち今を生きる人間と著者の遭遇した事件を手がかりとして、オーストラリア史が 10 の章に、概ね時系列によってまとめられている。各章では、読者は著者とともに、常に現代から出発するのである。「1　ドンとパット」では登場人物の紹介を兼ねて全体の見取り図が示され、「2　奪われた子供たち」ではオーストラリア先住民アボリジナルの歴史、彼らが現在にも続く問題を抱えていることが語られる。さらに、「3　流刑囚も立派な国民」から「6　マック・カントリーの外には」までに描かれているのは、18 世紀末イギリスの流刑植民地としてのはじまりから 19 世紀末まで、先住民を駆逐しつつ、イギリス本国との社会的・文化的・精神的つながりを維持・強化しながら「発展した」植民地オーストラリアである。ここで、オーストラリアが自由と民主主義を標榜しつつ、イギリスの文化や伝統にその出自を求めてきたこと、すなわち、イギリス帝国の一員であることの自覚がオーストラリア・ナショナリズムの原点であったことが明らかになる。さらに 19 世紀末にはオーストラリア・ナショナリズムが「反イギリス」的なアイリッシュ・ナショナリズムをも包含していく国民統合のメカニズム（プロセス）が述べられている。本書のタイトルが『猫に紅茶を』であることの意味も「4　美しい伝統を求めて」の中で明かされる。オーストラリアでは、イギリス風に猫も「紅茶」を「たしなむ」という。

「7　プライムミニスタとプレミアは同じ？」では、1901 年のオーストラリア連邦の成立の過程が示される。流血の「戦争」で独立を果たしたアメリカ合衆国と異なり、オーストラリアは合議や投票という民主主義的手続きを踏んで「連邦」を結成し本国の承認を得た。しかしながら、連邦結成の歴史は、著者によれば「消えた歴史」であり、愛国心やナショナリズムを培うための装置とはなりえなかった。1970 年代まで続いた「白豪主義」のオーストラリア連邦のありようが著者の具体的な体験に基づいて示されている。「8　白豪主義から白人性へ」と「9　オーストラリア国旗とアボリジナル旗のあいだ」では、白豪主義の問題と多文化主義の問題が扱われる。連邦結成と同時にオーストラリアは移民制限法によって「非白人」の実質的排除に乗りだすことになる。白豪主義のはじまりである。オーストラリアの白豪主義政策は 1970 年代に廃止され、以後は多文化主義を国家として表明するのだが、それは「ナショナリズムと言う強固な枠組みの内側」でのみ有効である。著者の考察は公的に多文化主義を表明する行為に潜む「白人性」にまで及んでいる。皮相的な多文化主義はかえって先住民やマイノリティの文化への侮辱にもなりかねないという主張には、筆者も考えさせられた。また、白豪主義を批判し、多文化主義を称揚することで自らの「白人性」を忘れる、ないしは免罪してしまう、多くの「グレイゾーン」にいる人びとの動向こそが問題であると著者は述べている。最終章、「10　ナショナル・シンボル」は、現在のオーストラリアの政治・経済・社会状況を概観し本書は締めくくられている。経済のグローバル化が進み、人・物・金・情報が国境を越えて自由に往来する 21 世紀初頭にハワード政権はその反動とも言えるようなナショナリズムを鼓舞し、国境の管理を強化し、移民に対する管理・監視を強めた。現実には国家の役割が低下し、国境の壁が低められてゆく世界的な趨勢の中で、国民に見える形で国家の枠組みと存在意義を示そうとしたと著者は論じている。

以上のように、本書はオーストラリア前史から現代までを、限られた紙数の中で簡潔かつ分かりやすくまとめた絶好のオーストラリア史入門書である。入門書でありながら読者をして「表層の歴史」の下の地下水脈としての歴史を読む気持ちに

させているのは、まさに著者自身が自己認識するように、「非」オーストラリア人である「ガイド」として、かえってオーストラリア人が気づかない表層と地下水脈の段差やずれを示しているからである。同時に、これは、著者自身の長く深いオーストラリア研究とそこに住む人々とのつながりというバック・グラウンドがあってこそ可能であったと言える。

最後に若干の注文をつけさせていただくとすれば、「白豪主義」の形成についての歴史的叙述をもう少し充実させてほしかった。連邦形成の努力と白豪主義がなぜ表裏一体として進められたのか、19 世紀末という世界史的コンテクストと関連があったのかなどの疑問が残った。また、「白人性」という語は、第 8 章のタイトルで使われているのみである。本文では、「オーストラリア社会が、白人の優越性をきわめて無批判に取り込んでいること」、「それは自覚的というよりは構造的なもの」であるとして、「白人性」の内容は示されてはいるが、「白人性」という言葉自体に不慣れな読者も多いことからすれば、やや説明不足ではないだろうか。また、「白人性」は著者が専門とされるテーマである。多くを期待して本書を読んだのは筆者だけではないと想像する。

なお筆者を含めて、本書によってオーストラリアという国とその歴史に興味を持たれた方には、同著者による『オーストラリアの歴史——多文化社会の歴史の可能性を探る』（有斐閣、2004 年）を読み進められることをお勧めする。著者が大学で学生たちとともに制作中のデジタル版オーストラリア辞典や年表の成果を取り入れ、資・史料も豊富に提示された本格的歴史書である。筆者の疑問もこの書を読めば解けるのかもしれない。

（安井倫子）